

令和2年度第2回横浜市創造界限形成推進委員会会議録	
日時	令和2年10月21日（水）14時00分～16時00分
開催場所	WEB会議形式（事務局設置：横浜市役所18階共用会議室さくら14）
出席者	野原委員長、六川副委員長、岡本委員、菅野委員、重松委員、日沼委員、簗谷委員、山口委員、恵良氏
欠席者	遠藤委員
開催形態	一部非公開
議題	<p>1 報告事項</p> <p>（1）今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について</p> <p>（2）今後の創造界限拠点の動きについて</p> <p>2 その他</p>
決定事項	<p>【開会】</p> <p>事務局 ○令和2年度第2回横浜市創造界限形成推進委員会を開始する。</p> <p>【資料確認】</p> <p>事務局 ○配付資料の確認が行われた。</p> <p>【定足数の確認】</p> <p>事務局 ○委員9名中8名が出席しており、委員会の成立となる。</p> <p>【会議の公開・非公開】</p> <p>事務局 ○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により原則公開となるが、報告事項（2）「今後の創造界限拠点の動きについて」は、同条例第7条第2項第5号に当たるため非公開とするが、よろしいか。</p> <p style="text-align: center;">（了承）</p> <p>【委員の変更について】</p> <p>事務局 ○旧第一銀行横浜支店事業評価及び運営団体選考分科会委員の変更について報告が行われた。</p> <p>報告事項（1）：今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について</p> <p><事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。></p> <p>野原委員長 ○ここまでの説明について、質問や意見はあるか。</p> <p>恵良氏 ○創造産業とまちづくりは場所に基づく形で議論しないと難しいだろう。つまり、横浜という場所に根差した社会活動や経済活動でお金が</p>

	<p>回るといふ視点で議論していく段階に来ている。例えばフランスの社会的連帯経済のように、凄く儲かるわけではないが継続性と文化性を持った経済行為が重要である。特に全体については、1つ目に物事をつなぐという意識を持たなければいけない。空間、時間、次世代、多様な市民をつなぐという捉え方が良いと思う。2つ目に述語を重視すること。すごい人が何かやるというよりも、市民がこういうメリットを感じたとか、そういう発想転換がそろそろ必要な時期かと思う。3つ目に、新型コロナでは、経済や社会へ働きかける中間組織がないことについてACY活動を通して感じており、この辺を把握していくということが必要になると思った。全体的には社会的経済活動をしっかり捉えて、継続性・文化性のある場所に根付いた行為として創造産業とまちづくりを進めること。そのときに意識するのは、1つはつなぐ意識、2つ目は述語発想、3つ目は中間組織。</p> <p>各拠点のプランニングでは、自立するため、あるいはつないでいくためのチャレンジをする提案というのを出示してもらったほうが良いと感じた。急な坂スタジオについては、パフォーミングアーツのエコシステムをしっかりと横浜で構築できる契機になる活動を積み上げている。KAAT、TPAM、赤レンガ、多彩なNPOなどのプレイヤーがいるので、そういう意識を改めて持つと良いと思う。象の鼻テラスは公共空間の難しさがあるが、前面の大さん橋前の水域から対岸の赤レンガと象の鼻がゲートをなす運河へと範囲を広げていくという発想もある。黄金町は不動産として解く段階に来ているが、この時に中核であるアートとリバーフロントを外すと全然違うものになってしまうが、不動産的発想を無視するわけにはいかない要件がある。場のブランディングはみんな共有できるので、そのときのまちづくりの考え方をもう一回再構築しないといけないと感じた。</p> <p>事務局 ○これまでの皆さんからの意見として、社会経済、場に根差した営みになるような日常的なところを創造都市の文脈でどう支えるか、インキュベーションやスタートアップ等とは切り分けた日常的な営みをどう持続させるかという観点でもっと議論を深めていったほうが良いという理解でよろしいか。</p> <p>恵良氏 ○概ねそういうことです。例えばIPOとかM&Aを目指すようなビジネススキームで戦う人たちは別の目標がある。横浜のアーティスト・クリエイターは、必ずしもそういうわけではない。世界で勝負することを目指す方もいるけれども、ベースは横浜に置いていますので、産業を議論するとき場所との関係というのを意識していくほうが創造都市施策的かなと思っている。1つだけ補足ですが、クリエイティブ産業の定義として英国等のものがあるが、それらは考えていくヒントとしてはいいが、横浜の目指してきた創造都市型の産業は何か。アーティスト・クリエイターがどこを目標にされているか、あるいは出口</p>
--	---

	<p>日沼委員</p> <p>事務局</p> <p>事務局</p> <p>菅野委員</p>	<p>論かもしれませんが、なぜ横浜でやっているのかというのをしっかり把握することが必要で、計画するサイドではなくて、活動されている方の思いというのを尊重していく方向で多分選別されてくるのではないかという予感はある。</p> <p>○創造都市の一つの特徴として、アーティスト・クリエイターの集積がある。今は誘致・支援される側で、それを受ける市民という2つの立場になっている。創造都市がもし豊かな帰着点を持つとしたら、アーティスト・クリエイター自身が市民でありステークホルダーになるという、その地で営みをして何らかの形で収益を得て定着して住むという社会が理想的なものと考えた。例えば、地方の地域創生ではクリエイターたちの移住・定住を目標にしてやっているところは目的もはっきりしている。一方で、横浜はクリエイティブなイベントが行われる拠点はあるが、そこで本当に営みを行って、経済活動に参加しているアーティスト・クリエイターがいるのか、収入源や仕事の内容がいまいちピンとこない。そのステークホルダーになるという流れが集積の目標かなど。またそういう調査ができればよいと思った。</p> <p>○関内外 OPEN!のように、定着し街に関わっていく、街に広がっていくという動きは、街場の方にも分かりやすく届くので可能性はあると思う。また施策を立案する上でのミッションやゴールはもう少し明確にする必要があると感じた。</p> <p>○アーティストが、住んでいる横浜という舞台でマーケティングができて日常的な営みができるということが、定着する上では非常に重要だと思う。そういう意味では、文化芸術も創造産業の両方とも横浜のマーケットはまだ成立していない。ただ、アーティストが市民になることもあるが、底上げという意味では、市民そのものもクリエイターであると。クリエイティブマインドを市民一人一人が最終的には持っていくというのも一つのゴールだと感じている。そのために横浜の関内地区、あるいはみなとみらいを含めたところでクリエイターの集積があり、そこから何か価値創造が生まれていく、エリアの価値が上がるということを市民に広げていくという意味からすると、「横浜市民一人一人がクリエイターである」ということを改めて目標に立てていいのかなという気がしている。そうすることによって横浜全体の都市ブランディングや横浜市そのものの価値が上がっていく。</p> <p>○論点について、ターゲットによって目的、達成目標、成果というものが異なるので、この辺をもう少し立体的に整理すると分かりやすくなると思う。これまでの歴史や集積により、各拠点の性格、長所・短所が見えてきたので、地域や拠点によってそれぞれの違いを明確にし、特徴を生かしたブランディングや市民に対しての目標設定、クリエイターにとっての目標設定も含めて考えたほうがいい。また、市民がクリエイターになるというのは、最終目標としてそういう考え方もあると</p>
--	---	---

		<p>思う。ちなみに、イギリスのアーツカウンシルが今年1月に発表した2020年から2030年までの計画の中で、イングランドに住んでいる人たち全員の創造性を伸ばすという、「Let's Create」というスローガンが目標設定された事例もある。</p> <p>事務局 ○論点の3つの分野については、平成16年の提言を踏まえて、まちづくり、経済、文化芸術の振興としたが、本来はもう一つ縦軸が必要になると思う。そういったクロスする部分は、今後たたき台や骨格を考えていく上で、検討させていただければと思う。</p> <p>恵良氏 ○市民に届ける話では、受け取る側からの広報の発想が大切。創造都市には15年のアーカイブがあるはず。そういうものを使いながら、届けようとする圧力が強過ぎるよりかは、受け取りやすいものを具体的に考えたらいいのではないかと感じた。</p> <p>簗谷委員 ○資料に書かれている課題は相反するものも含めて納得できる。まず停滞感という言葉だが、皆が何となく感じているものの、その原因やどうすればなくなるのかは現状明確な答えが分からない。単にPRを上手にやればいいのか、各拠点の活動内容に何か手を加えることが必要なのか、その理由が分からないと考えるににくい。例えば、BankARTでは高いクオリティーで非常に多岐にわたる活動をやっているが、果たしてそこに問題があるのかと考えるとそういうことではない気がする。課題がそれぞれあると言っても、やっていることの大筋は間違っていない。今やっていることがうまく横浜のブランディングにつながっていないことが、もどかしさになっているのではないか。もしくは関係者の飽きやアートやクリエイティブが各地でまちづくりに参入し、先進性が薄れた、コモディティー化しているのかもしれない。ただ、アートやクリエイティブはますます社会で力を持つことになるのは間違いないので、取組が始まったとき以上に、欠かせないものになっていると感じる。ブランディングの視点でのPR、横浜の街はクリエイティブだから住んでいることが価値になると思ってもらえる手立てができればいい。</p> <p>事務局 ○クリエイティブマインドを全市民が持つということについて、具体的にはどういったことをやるとそれが実現するのか。</p> <p>岡本委員 ○市民がクリエイティブマインドを持つという話だが、恐らく市民の方々は既にクリエイティブマインドをお持ちだと思う。それを発揮する機会や手法をいかに市や様々な人がアイデアを出し合ってつくるかということではないかと思う。</p> <p>六川委員 ○論点の中のまちづくりにおいて、民間事業者の投資を呼び込むスキームとあるが、例えばインセンティブや規制緩和など、全て事業者の採算性に重きが置かれているような気がする。その辺をコントロールしないと、容積率の緩和に伴う高層建造物だらけにもなりかねない。呼び込むスキームは大事だが、街に調和した建物やある程度の規制も必</p>
--	--	---

		<p>要ではないか。市民に認知してもらおうという意見は多く出ているが、具体的にどうやって認知してもらおうかを考えたほうがいいのではないかと思う。例として、旧第一銀行横浜支店では、ミュージックビデオの舞台になったということで、周辺はすごく潤った。つまり市民が参加して、見たいという場所になっていった。みんなが競って参加していただくような企画が各拠点でできるといいのではないか。もう少し広がりを持つためにも、広報も含めて考えていく必要があると思う。</p>
事務局		<p>○まちづくりについて、やみくもに規制緩和するということではなく、目的は何かということ。例えば映像産業などの創造産業を集積する、誘致するためにこんなことが必要だとか、インハウスやクリエイターをどのように引き出し活性化していくかなどの目的を少し明確化する必要がある。また簗谷委員からは停滞感の話があった。これはクリエイティブシティの歴史を紐解きたいと思うが、施策開始当時の横浜では、歴史的建造物の減少、関内地区の空き室増加による都市の衰退という現実があった。それを文化芸術が持つ創造性を生かして街を再活性化していこう、エリアの価値を上げていこうということで始まった。当時は衰退を意識して、クリエイティブで街を興していくということで始まった歴史があるが、現時点では拠点も当初と比べ活性化しているし、担い手も集積してきたということもあり、初期の目的は第1段階としては達成していると思う。ただ、第2段階以降を考えると現状でも衰退している、停滞しているという思いを皆さんが感じている。これは、ある程度集積したが、ここから新たな価値を生み出しているのか、新たに集積した担い手の人たちが普段の営みとして生活できているのか、マーケットがあるのか、という感覚が停滞感として如実に現れている気がしている。これからはエリアの価値をどうやって上げていくのか、一人一人の担い手の方々が活動していく場をどうつくれるのかが問われている。またその見える化が重要で、市民とのコミュニケーション不足、クリエイティブシティへの理解がうまくできていないので、何となく停滞感を感じているのではないか。</p>
	事務局	<p>○まちづくりについて、横浜らしい魅力的な都市空間の形成や地域資源の活用で、クリエイター・アーティストの集積を促す創造環境の実現のために取り組んでいるということで全体像としては押さえている。北仲 BRICK&WHITE は BankART1929 のシェアオフィスから始まり、再開発が終わり、文化芸術活動スペースとして BankART KAIKO も入ったが、もう少し計画に参加する方法もあったのではないかと感じている。旧市庁舎や港町地区等の開発などの民間事業者の投資スキームの中にどう組み込んでもらうのかという観点もあり、資料に記載している。六川委員が仰っているように、歴史的な景観も含めたヒューマンスケールに合う魅力的な空間を残すことが大前提であるということは誤解のないように伝えていきたい。</p>

野原委員長

○拠点に留まらず、その先にある「創造界限」をどう創っていくかが、プロジェクトの大事な面でもある。もともと横浜の界限はそれぞれキャラクターやポテンシャルがあるが、その辺をうまく引き出し切れていないのではないかと。次のステップとして、界限づくりに拠点をどう発展させていけるかを施策の中で意識していただきたい。大きな創造都市施策の中に文化芸術、産業振興、まちづくりの3つの柱があるという考え方も分かるが、それぞれが最後に枝分かれし、縦割りに感じる。それぞれ出てきた課題をクリエイティブに解決するときには創造産業とまちづくりを重ねるだとか、相乗効果を生み出す観点もあると思う。クリエイティブそのものを育てるだけでなく、クリエイティブに課題解決を図るあり方もある。市役所ではセクションに分離しているが、これをアーティスト・クリエイターが結びつける場が生まれてくると広がり生まれる気がする。まだ協働できていない部署同士も様々な場に顔を出していければ、事業としても回せるものになるのではと思った。他の委員からも示唆的な意見を頂いたので、この辺をベースにして、次回、議論ができる材料を整理していただければと思う。

菅野委員

○今まで各拠点が点や線で動いていたのが、今度こそ面で動く。それぞれ実績や歴史があるので、それが面として見えるようにしないと駄目だ。広報という点からも、拠点が連携・補完しあう協力体制や面化していく努力が第2ステップとしては欠かせないと思う。象の鼻テラスは市民が入りやすい場所になっているが、他の拠点は先進的ゆえの分かりづらさや敷居の高さがある。地理的要因などで入りにくい、行きにくいということがあれば、そうではない場所で市民が参加できるような企画をするなどの手法は考えられる。学校等との連携などによるアウトリーチは、横浜市別の部署でも既に実施していると思うが、市民に開いていく努力も第2ステップにおいては重要だと思う。これからは必ずしも経済成長が全てではなく、インクルーシブ経済やクリエイティブ経済、持続可能な発展の仕方をそれぞれの地域と場所で考えていく必要があると思う。創造界限でこれまで作ってきた実績と歴史を発展できるような形で大切に考えていければと思う。

報告事項（2）：今後の創造界限拠点の動きについて

<事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。>

その他

情報提供1：Creative Railway 実施報告について

<事務局より説明が行われた。>

<事務局から議事録の確認依頼や今後のスケジュールなどについて、事務連絡が行われた。>

	<p>事務局</p> <p>○これをもって、第2回横浜市創造界限形成推進委員会を終了する。委員の皆様、長時間ありがとうございました。</p>
<p>資 料</p>	<p>①次第</p> <p>② [資料1] 委員名簿</p> <p>③ [資料2] 前回議事録（令和2年7月31日開催分）</p> <p>④ [資料3] 「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について</p> <p>⑤ [資料4] 今後の創造界限拠点の動きについて</p> <p>⑥ [資料5] Creative Railway 実施報告について</p>
<p>特記事項</p>	